

「～ぽい」形式初探

賴錦雀

東吳大學日本語文學系副教授

中文摘要

本論文乃是從語詞結構、語意、用法等角度探討由日語接尾辭「ぽい」所組成之「～ぽい」形式，並獲得以下結論：

- (1) 「～ぽい」形式中的「ぽい」乃源於「多い (ooi)」之口音，為一接尾辭，無獨立用法，不能單獨使用。
- (2) 與「ぽい」結合之語詞有所限制，並非每個語詞皆可形成「～ぽい」形式。
- (3) 「～ぽい」依其前部語詞結構可分為「名詞+ぽい」「形容詞語幹+ぽい」「形容動詞語幹+ぽい」「動詞連用形+ぽい」「語基+ぽい」「詞組+ぽい」等類型。其中，以「名詞+ぽい」類型數量最多，生產力最高。
- (4) 「名詞+ぽい」類型具有可自由創造之特性，唯此種場合其俗語性質亦增加。
- (5) 「～ぽい」多表示說話者對於某種偏離自己價值標準之不良狀態的主觀評價。

- (6) 「～っぽい」形式之促音「っ」乃為表強調的「表情音」。
- (7) 「～ぽい」形式之構句機能與其他形容詞無異，除了可以當連體修飾語、連用修飾語外，亦可以當述語使用。

關鍵詞：～ぽい，接尾辭，形容詞，形態，語意，用法



「～ぽい」形式について

賴 錦雀

東吳大学日本語文学系副教授

要 旨

本稿は語構成、意味、機能から「～ぽい」形式を考察したものであるが、考察の結果は次のようにまとめられる。

- (イ) 「～ぽい」形式における「ぽい」は「多い」のなまりからできた接尾辞で、単独用法はない。
- (ロ) 「ぽい」と共起する造語成分には語彙的な制限がある。
- (ハ) 語構成から見た「～ぽい」は、名詞が前部成分になるものが多い。
- (ニ) 「名詞+ぽい」類型は個人の創造によって自由に造語できる性質を持つが、そういう場合は俗語性をもつようになることもある。
- (ホ) 「～ぽい」は多くの場合、ある対象が話し手の基準から外れて好ましくない状態になっていることに対する、話し手の主観性の強いマイナス評価を表わす。
- (ヘ) 「～っぽい」形式の「っ」は強調の意を表わす表情音である。
- (ト) 「～ぽい」形式の構文的職能は外の形容詞と余り変わらなく、連体修飾成分、連用修飾成分になる外、述語としても機能する。

キーワード：～ぽい、接尾辞、形容詞、形態、意味、用法

A Study of the “ $\sim poi$ ” Form

Lai, Jiin-Chiueh

Associate Prof. of Department of Japanese Language and culture
Soochow University

Abstract

The purpose of this paper is to describe the form, meaning and usages of the expression “ $\sim poi$ ”, which is formed from the suffix “*poi*”. A lot of new words can be created by the “noun + *poi*” form. The expression “*ikanimo* $\sim poi$ ” is one of the usages of “ $\sim poi$ ”. The “ $\sim poi$ ” form expresses a subjective concept. The “*sokuon*” (mora obstruent) in “ $\sim ppoi$ ” is for emphasis. The “ $\sim poi$ ” expression shares the same usages with most adjectives.

Key words: $\sim poi$, suffix, adjective, form, meaning, usage



「～ぽい」形式について

賴 錦雀

東吳大学日本語文学系副教授

1. はじめに

日本語形容詞には、「～ぽい」形式がよく見られる。「～ない」形式の「ない」や「～くさい」形式の「くさい」と違って、「ぽい」は単独で用いられることがなく、必ず次のように、接尾辞として外の造語成分に結合して用いられる。

- 1 彼には子供っぽいところがあるんだなあ。（遠ユⅡ p45）
- 2 涼太を迎えた知子はたった今床を上げたばかりの病み上がりの頬に、まだ熱っぽいいうるんだ瞳をしていた。（瀬夏 p18）
- 3 岡野が安っぽいジャンバーのポケットに手を入れて……（遠ユ p41）

管見では、近年の先行研究には、用例中心の松井（1983）（1985）、「一らしい」「一くさい」との比較がポイントである山下（1995）などが見られるが、『日本語学』「特集接辞」（1986年3月号）には「ぽい」に関するものが見られないほど、これまで「～ぽい」を中心に論じたものはあまり多いとは言えない。普通の辞書に登録された「～ぽい」形式の形容詞の数も実際に使われているものより少ないと想する。本稿では、形容詞語彙研究の一環として、「～ぽい」の語構成を明ら

かにし、「～ぽい」における「ぽい」及び「っ」の意味、そして「～ぽい」の構文論的職能を究明するのが目的である。このような考察によって、日本語語彙における「～ぽい」形式の位置付けが分かるようになるし、日本語教育における語彙指導にとっても有益な情報になるかと思われる。

2. 「～ぽい」か「～っぽい」か

一般の辞書に載っている「～ぽい」形式は、ほとんど「っ」が入っている「～っぽい」である。例えば、「飽きっぽい」「俗っぽい」「男っぽい」など。そして、『集英社国語辞典』（1993）、『岩波国語辞典』（第5版第2刷 1996）、三省堂『新明解国語辞典』（第五版第二刷 1998）などは、「一ぽい→一っぽい」と、「一ぽい」項では何も説明なしになっている。しかし、実例を見てみると、次のように「っ」の入っていないものも見られる。

4 そうしてその穴の中から時々ふうふうと煙を吹く。どうもむせぼくて實に弱つた。（夏猫 p5）

5 僕のやうに何日までも何日までも思い切れずに愚痴ぼく泣いてゐるものは無い。
(国な p170)

6 膨らんだ唇を小生意気に結んで、不機嫌ぽい顔で譲次を見てゐたのが……（国な p168）

7 夫はいまよりもっと「外国人ぽい」顔立ちで……（朝 1998年7月24日）

確かに、「～ぽい」形式には「っ」の入っているものが多いが、しかし、上のような「っ」の入っていない用例も見られるので、辞書では、「一ぽい→一っぽい」というよりも、「一ぽい」項を設けて、「～ぽい」形式と「～っぽい」形式をまと

めて説明したほうが親切だと思う。ちなみに、「一ぱい」「一っぽい」の形式を両方持つ形容詞には、次のようなものがある。

8 最う色ぽい事は止めにして奇麗薩張と、兄弟か友達の様な氣で交際を為てお呉れな。 (国な p170)

9 彼女は化粧のせいか、昔とくらべものにならぬほど、色っぽかった。
(遠ユ II p169)

10 —いい女だなア——と、浮気ぽい根性がうづ痒く動いて來た。 (続国な p184)

11 あなたは純情なんて何もなくてただ浮気っぽいから公明正大に人前に言った
り振舞ったりできないのでせう。 (国な p159)

12 いいえ、怒りぽいわ、でもいいひとです。病気なんですもの (続国な p184)

13 荒井と云ふのは、非常に怒りっぽいので『消炭』と云ふ譯名があったが (日
「怒りっぽい」項)

14 取り扱はれた人家のあとに、白ぽく、日の光りを受けてゐる土の面にも……
(国な p170)

15 白っぽい服がすぐ目にうつった。 (遠ユ p9)

16 火葬がすんでも故郷に持ち帰って埋める費用がないために埃っぽい棚の隅に押
し付けられたままの骨壺とか… (続国な p185)

17 広場を横切った彼は鞄をプラプラさせながら、白い埃っぽい道を歩いた。
(遠ユ p121)

18 郡視学と云へば、田舎では随分こは持ちのする方で、難しい理窟ぽい、取付
悪い質のものが多いが… (日「理窟ぽい」項)

19 でもああいふ理窟っぽいお話により、伴子さんの方のお話しを早く伺ひたかつ
たのよ。 (日「理窟っぽい」項)

本稿の考察では、「一っぽい」の形式が見られなくて「一ぽい」になっているものには、上述した「むせぽい」「愚痴ぽい」「不機嫌ぽい」「外国人ぽい」の外に、ちょっと古い用例だが、「藍ぽい」というのも見られた。

20 秩父銘撰の藍ぽい羽織を着て……（日「藍ぽい」項）

そのうち、「不機嫌」「外国人」が「つ」のない「～ぽい」形式になるのは、撥ねる音「ん」で終わる言葉の後に促音が来にくい、ということであろう。

3. 「～ぽい」形式の語構成

筆者が山田忠雄・他『新明解国語辞典』（第五版）、北原保雄『日本語逆引き辞典』、松井栄一『国語辞典にない言葉』『続・国語辞典にない言葉』、森田良行『意味分析の方法』などを参照して考察した結果、「～ぽい」形式の語構成は、その前部成分の品詞別によって次のように分けられる。

3.1 名詞+ぽい

赤っぽい	垢っぽい	悪っぽい	あざっぽい	汗っぽい
油っぽい	意地っぽい	田舎っぽい	色っぽい	嘘っぽい
浮気っぽい	遠慮っぽい	男っぽい	大人っぽい	女っぽい
学者っぽい	影っぽい	風っぽい	黄色っぽい	愚痴っぽい
玄人っぽい	げすっぽい	煙りっぽい	子供っぽい	粉っぽい
塩っぽい	四角っぽい	素人っぽい	皺っぽい	煤っぽい
俗っぽい	茶っぽい	艶っぽい	露っぽい	毒っぽい
涙っぽい	鼠っぽい	熱っぽい	埃っぽい	骨っぽい
水っぽい	娘っぽい	紫っぽい	理屈っぽい	五反田っぽい
品川っぽい	東京っぽい	大阪っぽい		



3.2 形容詞語幹+ぽい

浅っぽい 厚っぽい 荒っぽい いがらっぽい 卑しつぽい
えがらっぽい 惜しつぽい 幼っぽい 軽っぽい 寒っぽい
苦っぽい 眠っぽい 安っぽい

3.3 形容動詞語幹+ぽい

仇っぽい 哀れっぽい 悪戯っぽい エチっぽい エロっぽい
気障っぽい けちっぽい ざらっぽい 皮肉っぽい 不機嫌っぽい
不良っぽい

3.4 動詞連用形+ぽい

飽きっぽい 浮かれっぽい 疑りっぽい 恨みっぽい 恨みぽい
怒りっぽい 怒りぽい 濡れっぽい 腹立ちっぽい 僻みっぽい
惚れっぽい 見たがりっぽい 嘘っぽい 汚れっぽい 忘れっぽい

3.5 語基+ぽい

湿っぽい むかっぽい

森田（1988）は、「～っぽい」形式について、「動詞の連用形、形容詞・形容動詞の語幹、名詞に付」^①と述べているが、「湿っぽい」における「湿」は動詞の連用形ではなく、語幹というものである。そして、「むかっぽい」における「むか」は擬態語「むかむか」の「むか」なので、「語基+ぽい」というパターンにした。量から見れば、「名詞+ぽい」形式が一番多い。他の類型は語彙的に制限されているようである。

語種別で見てみると、前部成分が和語であるものは圧倒的に多い。「四角っぽ

① 森田（1998）1023頁参照。

い」「熱っぽい」「遠慮っぽい」などのような前部成分が漢語のものもあるが、和語ほど多くはない。そして「エロっぽい」「エチっぽい」のような外来語のものは僅かしかないようである。

語レベルの語構成から考察した場合、「～ぽい」形式は上のように分類されるが、その外に 3.6 のような、意味的に語を越えた、構文論的なレベルで分析しなければ把握しにくいものもある。

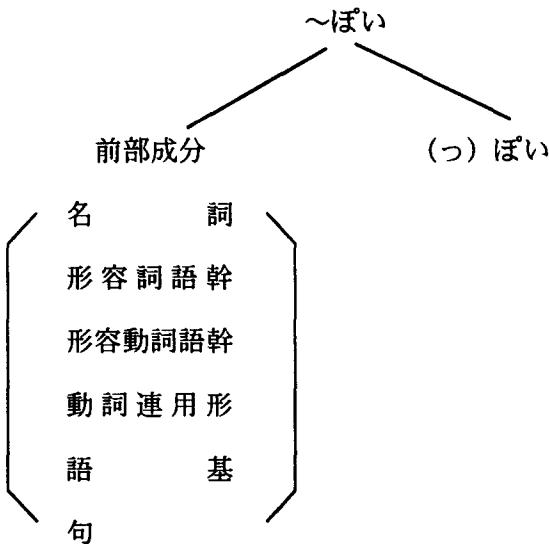
3.6 句+ぽい

聞いているっぽい 現代の若者っぽい 地位の象徴っぽい

「聞いているっぽい」は「動詞句+ぽい」という構造である。「現代の若者っぽい」「地位の象徴っぽい」は(1)〔現代の〔若者っぽい〕〕〔地位の〔象徴っぽい〕〕にも(2)〔〔現代の若者〕っぽい〕〔〔地位の象徴〕っぽい〕にも分析できそうだが、(1)の〔現代の〔若者っぽい〕〕〔地位の〔象徴っぽい〕〕は名詞「現代」〔地位〕と 3.1 「名詞+ぽい」の間に「の」が入ってできたもので、その後ろに何か名詞が来ないと、完結性が欠ける、落ち着かないものになるので、「～ぽい」形式の形容詞とはいえないが、(2)の〔〔現代の若者〕っぽい〕〔〔地位の象徴〕っぽい〕は、名詞句「現代の若者」「地位の象徴」に「ぽい」が付いてできたものなので、「～ぽい」形式の一つと認められる。このような類型のものは、「現代の若者」「地位の象徴」のように一定の特性をもっているものが前部成分に来なければ成り立ちにくいやうである^②。但し、「隣の部屋に住んでいる現代の若者」のような、固有的で限定的なものには「隣の部屋に住んでいる現代の若者っぽい」とは言いくらいやうである。

以上述べた「～ぽい」の語構造を図示すると、次の（図 1）のようになる。

② 森山（1986）23 頁参照。



(図1) 「～ぼい」の語構成

4. 「～ぼい」形式の意味

接尾辞「ぼい」は「多い」のなまりだと言われる^③が、それによる「～ぼい」は何をさすのか、考察してみよう。

4.1 辞書における記述

辞書では、接尾辞「ぼい」について次のような記述が見られる。

っぽい：（接尾・形型）何かをする（含む）度合が強い。

（山田忠雄・他『新明解国語辞典』第五版）

っぽい：（名詞・動詞連用形に付け、形容詞を作る）……の傾向が強い。

（西尾実・他『岩波国語辞典』第五版）

^③ 「ぼい」項『日本語教育辞典』426頁参照。

ぽい：名詞・動詞の連用形に付いて、そのような状態を帯びている意を表わす。

(林巨樹監修『現代国語例解辞典』第二版)

ぽい：(接尾) (形容詞型活用。多く上の語との間に促音が入って、「っぽい」の形で用いる) 名詞・動詞の連用形などについて、そのような状態を帯びている意を表わす。(市古貞次『国語大辞典』)

以上のような記述では、前部成分の違いによるそれぞれの「～ぽい」の意味の相違が無視された嫌いがあるように思われる。以下、3で見た前部成分による類型別で「～ぽい」の意味について見てみたい。

4.2 類型別に見る「～ぽい」の意味

「名詞+ぽい」形式はまた次のように下位分類できる。

(イ) 色名+ぽい

赤っぽい 青っぽい 黄色っぽい 黒っぽい 白っぽい
茶っぽい 茶色っぽい 紫っぽい

(ロ) マイナス評価の名詞+ぽい

垢っぽい 悪っぽい あざっぽい 汗っぽい 油っぽい
浮気っぽい 愚痴っぽい

(ハ) 中立評価の名詞+ぽい

男っぽい 大人っぽい 女っぽい 学者っぽい お祭りっぽい
少女っぽい

(二) 地名+ぽい

五反田っぽい 品川っぽい 東京っぽい 大阪っぽい

(イ) 類の色名は、形容詞の語幹になるものもあれば、そうでないもの——例えば「茶っぽい 紫っぽい」——もある。故に、ここでは「赤っぽい 青っぽい 黄

色っぽい 黒っぽい 白っぽい」などを「形容詞語幹+ぽい」類型にしないで、「名詞+ぽい」類型にした。次の例で分かるように、「色名+ぽい」における「ぽい」は、前部成分の色の要素が圧倒的だ、という話し手の主観的な捕らえ方や感覚を表わすのである。

21 吉本は坐ったまま障子をあけて、黄色っぽくムクンだ大きな顔を出した。

(国な p159)

22 便が時々、黒っぽかったり、細くなったりしませんか。 (遠ユⅡ p141)

23 全体に空が白っぽい、薄曇りの日だったなあ。 (大雨 p253)

これは次のような、ただ事物の属性を述べる「色名+い」形式とは違っている。

24 その背広に気の毒なような黄色い腕章をつけて玄関に整列し…… (有更 p7)

25 大きな黒い車に乗った玄助を見送ると…… (有更 p31)

26 紀代が、はっとして白い顔を上げたとき、豪宕な笑い声が聞こえて外から襖が開いた。 (有更 p22)

「色名+い」の客観的叙述と「色名+ぽい」の主観的叙述の違いは、次のような用例では一番明らかになるかと思う。

27 赤いブラウスに、白っぽいグレーのカーティガン姿は、女中にしては洗練されていると思われるが…… (有更 p13)

「赤いブラウス」が客観的にブラウスが赤いものであることを述べているのに対して、「白っぽいグレーのカーティガン」のほうが「グレーのカーティガン」を

「白みを帯びている」ように思う話手の主観的な感覚を表わしている。

(口) 類の前部成分は、あまり喜ばれないマイナス評価の名詞である。接尾語「ぽい」との結合によってその名詞が形容詞化すると共に、そのマイナスイメージが一層強く出されるようになるものである。これは森田(1996)が指摘したように、ある対象が、話者が理想として期待する状態やレベルから離れて好ましくない状況にあることをいうのである①。

28 年寄りは愚痴っぽい。(国「愚痴っぽい」項)

29 私は埃っぽい丸善の中の空気が、その檜箪の周囲だけ変に緊張してゐるやうな気がした。(国な p160)

(ハ) 類の前部成分自体は評価性を含まない名詞である。例えば、

30 彫りの深い顔に不思議な女っぽさが匂っていた。(国な p166)

但し、それは(ハ)類「一ぽい」形式が評価性のある表現にならないということを意味するのではない。次の用例31~32を見て分かるように、文脈によって(ハ)類の「一ぽい」形式がマイナス評価になることもある。

31 トモ子の英語の文字は子供っぽかったが正確だった。(遠ユⅡ p260)

32 妻というのは、男の心理から言うと結婚して、子供ができるまでのあの、まだ頼りなくて、娘っぽくて、まだお尻なんかも小さくて、こっちが怒鳴れば涙ぐむ——そんな感じなのである。(遠ユⅢ p49)

① 森田(1996) 136頁参照。

「子供」「娘」には評価性がないはずだが、上の例ではマイナス評価になっている。

(二) 類「地名+ぽい」は、いかにもその土地らしいの意を表わすものである。
別に評価性を含まないと思う。

33 「そろそろ品川じゃない」「ほんと品川ッポイわよ」(見こ)

34 「あの人だれ?五反田っぽい顔して」(見こ)

「名詞+ぽい」類型は、時には俗語的ニュアンスが感じられることがある。それは、その前部成分が普通付き得るとされた語彙範囲の枠を越えたものの場合である。上の「地名+ぽい」もその例であるが、他に「火星人っぽい顔の男」「世紀末っぽい風潮」などが見られる。こういう「ぽい」による造語は個人の創造任せ、造語のできる自由を持っているだけに、俗語的印象を与えやすいと言われている^⑤。生産性から見れば、次の用例のようにいくらでも造られる、いわゆる俗語的なパターンのおかげで、「名詞+ぽい」類型の造語力が高いと言える。

35 知事選ってちょっとお祭りっぽいところがあつて…(朝 1998年7月3日号)

36 ふだん天功さんが着ているボンデージっぽい衣装って、「資本主義的退廃だ」って言われなかつた?(朝 1998年7月31日号)

「形容詞語幹+ぽい」形式は、「惜しへぽい」「卑しへぽい」を除いては、その前部成分が属性を表わす形容詞の語幹である。

37 ……荒っぽくストーリーを紹介するところなるが……(産 1998年7月15日)

⑤ 森田(1996)89頁参照。

38 自分の喉がおよそイガラッぽく……（大雨 p144）

39 子供は珍しい虫でも見つけたときのように、幼っぽい気まぐれの熱中、無邪
気そのものの乳くさい昂奮に囚われた声で言った。（国な p166）

40 ……肉のように赤っぽい大きな顔……（大雨 p111）

この類型における形容詞成分は殆どマイナスイメージの言葉であるが、そうでないものもある、例えば「安っぽい」。「安い」こと自体には評価性がないと言えようが、用例 3 のような文脈では、マイナスイメージになっている。そして、「安っぽい」というと値段は必ずしも安いとは限らない。ただ、価値のあるようなものには見えない、という話し手の気持ちを表現しているのである。逆に、「荒い」はもともと「調和が取れていない」^⑥意で、マイナス評価であると言えようが、用例 37 では、おおざっぱに述べるという意味で、マイナスイメージがないと解釈できよう。また、形容詞語幹に「ぽい」がついた「～ぽい」形式は、そうでない形容詞に比べると、他の意味合いを帯びて「中身まで質が違ってしまっていると感覚的にとらえた言葉」^⑦なので、主観性がとの形容詞より強いと言える。例えば「浅っぽい 厚っぽい 軽っぽい」の主観性が「浅い」「厚い」「軽い」より強いということである。

「形容動詞語幹+ぽい」類型は、本稿の考察した限りではその前部成分がすべてマイナスイメージの言葉である。但し、「ぽい」の付かないマイナス評価の前部成分は、ただある対象の属性を表わすにすぎないが、「ぽい」の添加で、そのマイナスイメージが絶対的なマイナス評価になり、話し手の感覚を表わすようになる。例えば、「悪戯な子」の「悪戯」はただ子供の、大人の迷惑になるような性質を表わ

⑥ 「国語大辞典」「荒い」項

⑦ 森田（1988）1205 頁参照



すのに比べて、「悪戯っぽい」は人の迷惑になるような性質を表わすと共に、話し手の相手に対する感覚的な捕らえ方が表わされているのである。そして、次の用例ではやはり「形容動詞語幹+ぽい」でないと、リアルに相手の笑い方や視線、声に対する話し手の主観的なマイナス評価を表わすことができないと思う。

41 女の子は悪戯っぽく笑いながら……（遠ユ p197）

42 今まですましていた同席の娘の一人が、悪戯っぽい眼をして私に言った。
(遠ユ・p127)

43 紀代は前島氏に、いたずらっぽい視線を送って、自分から先に笑い出して…
…（有更 p22）

44 ママは嘲るように二人の背中に皮肉っぽい声をあびせた。（遠ユ II p23）

ちなみに、「～ぽい」は状態を表わす言葉ではあるが、「形容詞語幹+ぽい」類型も「形容動詞語幹+ぽい」類型もその前部成分になる言葉に語彙的な制限があるので、生産性が高いとは言えない。

「動詞連用形+ぽい」類型も造語力があまり高くないものである。そして、その前部成分は、すべて「飽きる」「怒る」「嘆せる」「僻む」「忘れる」のようなマイナスイメージの動詞の連用形である。性質から見れば、「疑る 怒る 恨む 惹れる 忘れる」のような人間の感情や気持ち、性質を表わすものと、「しける 嘆せる 汚れる 濡れる」のような状態を表わすものの二種類に下位分類される。ただし、そのいずれも殆どマイナスイメージを含んでいるものであり、そして、次の用例で見るよう、「ぽい」がついた「～ぽい」形式もマイナス評価のものになる。

45 いいえ、怒りぽいわ、でもいいひとです。病気なんですもの（続国な p184）

46 惚れっぽい仙花姐さんの性格を見抜いていたのだ。（国な p160）

- 47 まあ忘れっぽくて入らっしゃることね。 (国な p161)
- 48 その丸くふくらんだ顔の、端的な愚かしさ、怨みっぽい醜さに、僕は制御しようもない嫌悪を感じた。 (大雨 p280)
- 49 私も彼女も終戦までは、美しい仏租界の中に住んでゐたため、よごれっぽい
ホンチュウ
虹口の街が嫌ひなのであった。 (国な p160)
- 50 そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと煙を吹く。どうもむせぼくて實に弱つた。 (夏猫 p5)

人間の感情や気持ち、性質を表わす動詞に「～ぽい」が付いてできた「～ぽい」は、①主体がそのようなマイナス状態になりやすい傾向にある、②主体がある対象によってそのようなマイナス状態になっている、という意味を表わす。例えば、上の例では、「怒りぽい」(例 45)は主体が怒りやすい傾向を持っていることを、「惚れっぽい」(例 46)は主体が人に惚れやすい性格であることを、「忘れっぽい」(例 47)は、主体が何かを忘れやすい性質を持っていることを表わしているが、「怨みっぽい」(例 48)は主体が相手のことを怨んでいる状態になっていることを表わしている。但し、同一語で、主体がそのようなマイナス状態になりやすい傾向にあることを表わしたり、主体がある対象によってそのようなマイナス状態になつていることを表わしたりするものも見られる。次の「疑りっぽい」はその例である。例 51 は相手が何かについて疑う気持ちになりやすい女だということを話し手が判断したことを言っているが、例 52 は話し手自身が何かを疑っている状態になついることを表わしている。

- 51 お前はよッぽど疑りっぽい女だ。 (国な p165)
- 52 疑りっぽいのは、お前がそんなところから俺を眺めているからだ。
(国な p165)



状態を表わす動詞に「～ぽい」が付いてできた「～ぽい」は、ある対象が前の動詞が表わすマイナス状態になっていることを話し手が捕らえた言い方である。上述した例では、「よごれっぽい虹口の街」（例 49）は「虹口の街」が汚れている状態を話し手が捉えた言い方であるが、「むせっぽくて実に弱った」（例 50）の「むせっぽい」は自分がいる場所がそのような状態になっていると話し手が感じたことを意味している。

次は「語基+ぽい」類型について見てみよう。前述したように、「湿っぽい」は普通、動詞類に分類されたが、ここでは「湿っぽい」における「しめ」が動詞連用形でないので、「語基+ぽい」類型に分類した。この類型は語例数が随分少ない。今回の考察では「湿っぽい」と擬態語の「むかむか」による「むかっぽい」しかない。ちなみに、その生産性もあまり期待できないであろう。例 53 で見るよう、「湿っぽい」は何かが「湿る」状態になっていることを話し手が感じたことを意味する。

53 はじめのうちは、ひかえめではあるが息子の不幸への確かな配慮のある湿つ
ぼさは忘れたように……（大雨 p147）

「句+ぽい」類型の場合、本稿の考察では評価性のないものが前部成分になるが、例 54 のように「句+ぽい」全体も評価性のないものである。

54 ドイツでは（中略）携帯電話は英語風に handy（ハンディ）と呼ばれてきた。
「地位の象徴」つぽかつたことを物語る命名だ。
(朝 1999 年 2 月 19 日号 p43)



4.3 「～っぽい」における「つ」の意味

前述した「黄色ッぽい」（例 21）「イガラッぽい」（例 38）などにおいては、「つ」が平仮名ではなく、カタカナで表記されている。この表記を見て分かるように、「つ」は「ぽい」とは一纏まりのものではなく、「ぽい」とその前部成分の間にに入ったものである。そして、その「つ」は、次の用例における「恐ろしくって」「情けなくって」「可愛くって」の「つ」と同じように、強調を表わす表情音の一つである。

55 ……万が一、事故を考えたら恐ろしくって……（平女 p40）

56 私は情けなくて、情けなくって。（有青 p222）

57 引田天功さんというと、お人形みたいに可愛くってチャーミングな女の子…
…（朝 1998 年 7 月 31 日号 48 p48）

それは、下の用例 58、59 における撥ね音、長音と同じようなものである。

58 「私、すんごいモデルんですよ」（朝 1998 年 7 月 31 日号 p48）

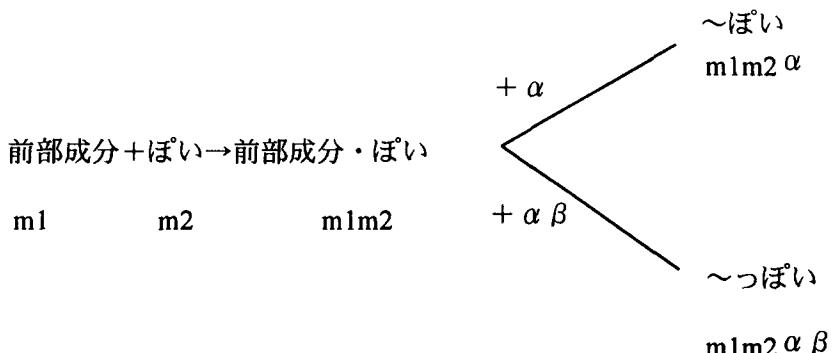
59 「京都の人間は昔からイジわる二いところがある」（遠ユⅡ p89）

「ぽい」の「ぼ」は半濁音なので、その前には撥ねる音でも長音でもなく、促音という表情音が來るのである。



4.4 「～ぽい」 形式の意味

(形容詞化)



(図 2) 「～ぽい」 の意味

以上述べた「～ぽい」形式の意味を図示すると、上の(図 2)のようになる。 m_1 は前部成分の意味を、 m_2 はそのような状態を帯びている意を表わす「ぽい」の基本意味である。但し、「～ぽい」の意味は m_1 、 m_2 の他に、 α 或いは $\alpha\beta$ というのが入っている。 β は強調の意を表す。そして、 α は以下のいずれかを意味するのである。

- (1) 前部成分の要素が圧倒的だ、という話者の主観的な捉え方や感覚。
- (2) ある対象が、話者が理想として期待する状態やレベルから離れて好ましくない状況にある、という話し手の主観的な捉え方や感覚。
- (3) ある対象が前部成分が表わすマイナス状態になりやすい傾向にある、という話者の感じ。
- (4) ある対象に対する、話し手の主観性の強いマイナスイ状態評価。
- (5) 俗語的ニュアンス。



5. 「～っぽい」形式の用法

構文論的に見た場合、「～っぽい」形式は普通の形容詞と同じような機能を持っていて、言い換えれば、連体修飾成分（例 60～65）にもなるし、連用修飾成分（例 66～68）にもなるし、そして、述語（例 69～74）としても機能する用法を持っているのである。

60 ……赤っぽい水着のなかにおさまらないのだ。 （大雨 p233）

61 ……左脇を、まず荒っぽいクロールで追いこして行ったのだ。 （大雨 p258）

62 雅志は黒っぽい背広、千里は喪服だった。 （平女 p201）

63 白っぽい螢の火はいつとなく黄みを加えて、日も暮れた。 （川千 p129）

64 鈴木氏は、あの四角っぽい顔で、やはり四角っぽい顔の花森氏を訪ねた。

（見こ）

65 昔かたぎの骨っぽい男だった。 （産 1998 年 7 月 22 日）

66 私の場合、乳房を水着から出して陽にあててると、熱っぽく嵩ばって、全体に硬くなるようなよね。 （大雨 p233）

67 お父さまは悪戯っぽく眼の奥でお笑いになってから……（有青 p138）

68 女子の言葉遣いや素振り、持ち物が男っぽく思われ…（産 1998 年 7 月 22 日）

69 なんて、子供っぽいでしょう、男って。 （遠ユ II p47）

70 便が時々、黒っぽかったり、細くなったりしませんか。 （遠ユ II p141）

71 暖房はきいているが、床の間や襖の造りがどことなく安っぽい（平女 p280）

72 しかし、何しろ芸が下手だ。発声も素人っぽい。 （遠ユ p145）

73 どうして、あの人と寝ているといつも真冬っぽいのかしら。 （吉白 p42）



74 ……モダンな建築だった。かなり大きく、造りも安っぽくない（平女 p107）

そして、「～ぽい」の語幹に「さ」を付けて名詞を形成することもある。

75 はじめのうちは、ひかえめではあるが息子の不幸への確かな配慮のある湿っぽさは忘れたように……（大雨 p147）

76 木綿子の声は静かだったが、異様な熱っぽさを含んでいた。（平女 p370）

77 ……身のこなしや表情はどこかに玄人っぽさを残している。（平女 p267）

78 千里は慎吾の子供っぽさを笑った。（平女 p129）

79 昨年、航空大学を卒業したばかりで学生っぽさが抜け切っていない。

（平女 p14）

なお、「いがらっぽい」の語幹が形容動詞として用いられる用例（例 80）も採集したが、1 例しかないし、話者が関西の人なので、「～ぽい」の語幹の形容動詞への転成は日本語の一般的な用法とは言えないであろう。

80 「いや、ちょっと喉かいがらっぽになっただけや」（有青 p8）

6. しめくくり

「～ぽい」について考察した結果をまとめてみると、次のようになる。

(イ) 「～ぽい」形式における「ぽい」は「多い」のなまりからできた接尾辞で、

単独用法はない。

(ロ) 「ぽい」と共起する造語成分には語彙的な制限がある。

(ハ) 語構成から見た「～ぽい」は、名詞が前部成分になるものが多い。

- (二) 「名詞+ぽい」類型は個人の創造によって自由に造語できる性質を持つが、そういう場合は俗語性をもつようになることもある。
- (ホ) 「～ぽい」は多くの場合、ある対象が話し手の基準から外れて好ましくない状態になっていることに対する、話し手の主觀性の強いマイナス評価を表わす。
- (ヘ) 「～っぽい」形式の「っ」は強調の意を表わす表情音である。
- (ト) 「～ぽい」形式の構文的職能は外の形容詞と余り変わらなく、連体修飾成分、連用修飾成分になる外、述語としても機能する。

野村（1994）も指摘したように、最近の若者言葉においては、「〇〇っぽい」と「〇〇らしい」との区別がなくなり、「〇〇らしい」を使うべきところを「春っぽい」「夢っぽい」「人間ぽい」「カジュアルっぽい」「見たがりっぽい」「聞いているっぽい」というように「〇〇（っ）ぽい」が用いられる例がある^⑧。そして、その「～ぽい」にも「～らしい」と同じように「いかにも～」という用法が見られる（例81を参照されたい）。

81 『海まで5分』には、男達が立ち寄る止まり木として、『かもめ』というシャレたバーが毎回登場する。いかにも湘南っぽいが、少し大人っぽく仕立ててある。（産1998年8月11日）

これは言葉が生きているものの証拠の一つだと思うが、一過性のものなのか、これからも使われ、定着するようになるものなのか、考察し続ける必要がある。

⑧ 野村（1994）278～279頁参照。



用例出典

- (有青) 有吉佐和子『青い壺』, 文藝春秋, 1980
- (有更) 有吉佐和子『更紗夫人』, 集英社, 1985
- (遠ユ) 遠藤周作『ユーモア小説集』, 講談社, 1973
- (遠ユⅡ) 遠藤周作『ユーモア小説集・』, 講談社, 1974
- (遠ユⅢ) 遠藤周作『第三ユーモア小説集』, 講談社, 1977
- (大雨) 大江健三郎『「雨の木」を聴く女たち』, 新潮社, 1982
- (川千) 川端康成『千羽鶴』, 新潮社, 1955
- (国) 市古貞次・他『国語大辞典』, 小学館, 1981
- (国な) 松井栄一『国語辞典にない言葉』, 南雲堂, 1983
- (瀬夏) 瀬戸内晴美『夏の終り』, 新潮社, 1966
- (続国な) 松井栄一『続国語辞典にない言葉』, 南雲堂, 1985
- (夏猫) 夏目漱石『吾輩は猫である』, 旺文社, 1965
- (日) 金田一京助・他『日本国語大辞典』, 小学館, 1972
- (平女) 平岩弓枝『女の足音』, 集英社, 1978
- (見こ) 見坊豪紀『ことばのくずかご』, 筑摩書房, 1979
- (吉白) 吉本ばなな『白河夜船』, 福武書店, 1992
- (産) 産經新聞
- (朝) 週刊朝日

参考文献

北原保雄『日本語逆引き辞典』, 大修館, 1991

斎藤倫明「語構成と意味」『国文学解釈と鑑賞』60-1, 至文堂, 1995



西尾実・他『岩波国語辞典』（第5版第2刷），岩波書店，1996

野村雅昭『日本語の風』，大修館，1994

林巨樹監修『現代国語例解辞典』（第二版），小学館，1997

松井栄一『国語辞典にない言葉』，南雲堂，1983

『続国語辞典にない言葉』，南雲堂，1985

森田良行『基礎日本語辞典』，角川書店，1988

『意味分析の方法』，ひつじ書房，1996

森山卓郎「接辞と構文」『日本語学』3月号，明治書院，1986

山下喜代「形容詞性接尾辞『一ぽい・らしい・くさい』について」『講座日本語教育』，早稲田大学，1995

山田忠雄・他『新明解国語辞典』（第五版第三刷），三省堂，1998.

